チャイルド・ファンド・ジャパンだより

[スマイルズ] 2023年2月NO.53

SMILES

https://www.childfund.or.jp

特集 ネパール支援地域の今を歩く

ChildFund Japan

チャイルド・ファンド・ジャパンは、1975年より、
アジアを中心に貧困の中で暮らす子どもの健やかな成長、
家族と地域の自立を目指した活動をしています。

ネパール支援地域の今を歩く

視察で見えた支援の成果と新地域の課題

ヒンドゥー教で祝福を表す赤い印「ティカ」を額につける西川（前列左から4番目）と現地の人たち

新型コロナウイルスのまん延によって、事業地視察が難しかったこの2年間。2022年後半に入り、ようやく東京事務所のスタッフが現地に訪問することができるようになってきました。

今回の特集では、2022年9月に、東京事務所スタッフの西川（支援者サービス課）がネパールで訪問した２つの地域の様子についてお伝えします。8年間支援を続けてきた地域と支援を開始したばかりの地域。両者には様々な違いが見られました。

山道を四輪駆動車で進み支援地域へ

2022年9月、2014年からスポンサーシップ・プログラムや外務省の助成金などで総合的に支援を続けてきたシンドゥパルチョーク郡と、2022年に支援を開始したばかりのダーディン郡をそれぞれ訪問しました。

山道を1時間半かけて通う子どもたち

どちらの支援地域も行くだけで一苦労。舗装された幹線道路を進んだ後、土や砂利の山道を四輪駆動車で1～2時間登らなければいけません。雨季が終わっているはずの9月でしたが、まだ雨が降り、道はぬかるんでいました。そのような道を人々は買い物に行き、家畜のえさを取りに行き、子どもたちは学校へ通うのです。山の中に学校があること、通学に時間がかかることは聞いていましたが、「こんなに山深いところだとは」と、その大変さを身をもって実感しました。

通学時間の長さは学校中退の一因でもあるそうです。寄宿舎があればその問題が解決できるのだけれどという声も聞こえてきました。

設備から見える支援の成果と課題

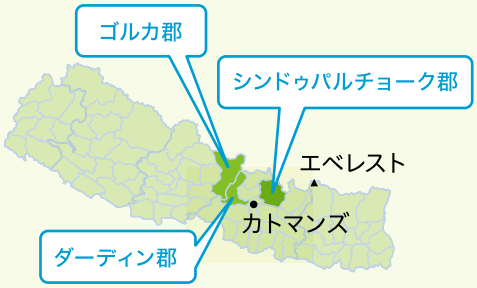
シンドゥパルチョーク郡、ダーディン郡ともに、いくつかの学校を訪問しましたが、新しい支援地域であるダーディン郡の学校は、外観、教室ともにきれいではなく、なにより備品が少なかったです。それに対してシンドゥパルチョーク郡の学校は、校舎、教室、理科室、図書室など、しっかりと整備されていました。チャイルド・ファンド・ジャパンのスポンサーシップ・プログラムをはじめ、外務省の助成金やチャイルド・ファンドのメンバー団体の支援もあって、総合的に支援してきた結果です。

左がダーディン郡、右がシンドゥパルチョーク郡の学校

違いが見られたのは、建物などのハード面だけではありません。ソフト面でも違いがはっきりしました。例えば、どちらの地域にも子どもクラブ（日本の児童会や生徒会に近いもの）がありますが、ダーディン郡では子どもクラブで何をしたらいいのか分からない、という声が聞こえました。それに対し、シンドゥパルチョーク郡の子どもクラブでは、子どもたち自身が手洗い講習といった企画を考えて、大勢の生徒たちの前で講習を開いたり、定例会で学校の問題について話し合いをしたりする様子が見られ、自発的に活動していました。

子どもクラブの集まり

ネパール基本情報とチャイルド・ファンド・ジャパンの支援



人口	約2,900万人
面積	14.7万km²（北海道の約1.8倍）
気候帯	亜熱帯～極地帯
宗教	ヒンドゥー教81%、仏教9% 等
経済	一人当たりGDP 1,191米ドル

インドと中国にはさまれた内陸国ネパール。ヒマラヤ山脈のような高地から平野部まで、多様な地形と気候をもつ国です。ヒンドゥー教のカースト制度が根強く残り、低いカーストに属する人々やカーストに属さない人々、少数民族の人々は、社会的にも経済的にも厳しい状況に置かれています。

徐々に経済発展しつつあるものの、例えば教育面では、最貧困層の識字率が50%以下、中学校最終学年まで在籍する子どもの割合が64%など、様々な課題が残されています。児童労働、早期婚、子どもの人身売買なども大きな課題です。

チャイルド・ファンド・ジャパンは、スポンサーシップ・プログラムでの支援などを通して、学校へ通い続けられるようにするための学用品の支援、質の高い教育を受けることができるようにするための学校教育の改善支援といった教育支援をはじめ、児童労働、早期婚、暴力などから子どもを守るための子どもの権利啓発活動などを進めています。

「教育の大切さを伝えてほしい」

今回の視察では、子どもたちへのインタビューも行いました。ダーディン郡の子どもたちは、インタビューが初めての子が多かったのか、恥ずかしがって消え入るような声で一言二言しかしゃべらないということもしばしば。それでも、ある学校の子どもクラブの委員長である女の子は、支援に期待することを堂々と話してくれました。

「親たち自身きちんと教育を受けてこなかった家庭が多く、子どもたちへの教育の重要性を実感していない。スポンサーシップ・プログラムで、そうした親たちも含めて教育の重要性を教える機会をつくってほしい。」子どもの教育を守るためには、親の理解が不可欠だと、強く訴えていました。

実際、親たちの中には稼いだお金を子どもの教育ではなく、飲酒に使ってしまう例があるそうです。教育を受ければ子どもたちの未来の可能性が広がる、それを親たちにも、子どもたち自身にも知ってもらいたい。強くそう感じました。

また、ダーディン郡に多いチェパンという民族は、女の子が早すぎる結婚によって学校をやめてしまうケースも少なくないといいます。

現地の協力NGOの職員に、チェパン族の女性が2名いて、子どもたちへのロールモデルとなっているそうですが、そうした例も示しながら、啓発活動が行われていくことを期待したいと思います。

インタビューや学校の様子の動画などをこちらからご覧いただけます。

先生や地域の人々の力を引き出し、質の高い教育を子どもたちに

シンドゥパルチョーク郡の学校では、モデル授業として子どもたちに実際に授業を行っているところを見せてもらうことができました。これまでの支援によって、教材作りや指導法の研修を受けてきたことで、教室内の手作りの教材をうまく使いこなし、子どもたちの興味を引き出しながら授業を行っていました。ダーディン郡の学校でも、こうした研修を行って子どもたちが興味をもって参加でき、学んだことがしっかりと身につくような授業ができるようになると思います。

学校への支援は、先生に対するものだけではなく、学校運営委員会という組織へも行っています。学校運営委員会は、先生、保護者、地域の人たちからなり、自治体の長が委員会の長を兼ねていることも多いので、地域全体で学校の改善に取り組むことができます。

シンドゥパルチョーク郡では、委員会のメンバーがモデル校の見学を行い、学校の運営の仕方などについて学び、自分たちの学校の改善に役立てたそうです。ダーディン郡ではまだまだ先生たちのモラルが低く、勤務時間を守らないといった例があるそうですが、先生たちのモラルを高めるためには、学校運営委員会のモニタリングが欠かせません。スポンサーシップ・プログラムで学校運営委員会を支援することで、こうした問題を解決するとともに、委員会の活性化をはかることができるでしょう。

年表で振り返るネパール支援

1995

ネパールでの支援開始

保健事業や女性支援、住民組織強化支援などを実施

2009

ラメチャップ郡で支援開始

2009年からの準備期間を経て、2010年にはスポンサーシップ・プログラムを開始

未来の子どもたちにも笑顔を

どちらの地域も自然が豊かで、子どもたちの笑顔は素敵でした。その子どもたちが大人になってもお酒に逃げたり、早期婚で学校をやめてしまったりせず、仕事をもって笑顔で暮らしていけるように少しでも手助けができるなら、これほど嬉しいことはありません。それには皆さまのご協力が欠かせません。シンドゥパルチョーク郡での支援の成果は皆さまのお力に負うところがとても大きいのです。どうかこれからも新たな地域でのチャイルド・ファンド・ジャパンの活動をお支えください。

日本の皆さん、ナマステ！ネパール事務所スタッフ紹介！

チャイルド・ファンド・ジャパンのネパール事務所では、現在、現地スタッフと日本人駐在員が働いています。2022年10月には、数年ぶりにスタッフが東京事務所に来日し、支援者さまとの交流会も開催しました。ここでは、来日したスタッフから2名をインタビュー形式で紹介します。

ビモール・ベトワル
Bimol Bhetwal

2021年入職。事業部長として、支援活動の全体的な運営管理を担当。

子ども支援にたずさわりたいと思ったきっかけは？

子どもの頃、学校の子どもクラブで熱心に活動していました。その中で、子どもにかかわる様々な問題があることを知り、自分にもできることがあるのではないかと感じたのが、現在の仕事につくきっかけになったと思います。

仕事のやりがいはどんなところですか？

ある地域の支援を始めたとき、子どもたちははじめ恥ずかしがって、私を見ると逃げ出したりしていました。ですが、活動を続けるうちに、子どもたちは自信をつけていき、人前でもしっかりと話せるようになっていきました。子どもの成長が嬉しかったですし、私のところにも駆け寄ってくれるようになり、感激しました。

支援者の皆さまにメッセージをお願いします

いつもご支援ありがとうございます。ネパールには、まだまだ支援を必要とする子どもたちがたくさんいます。そうした子どもたちが10年生※まで終えられるように支援したいと思っています。引き続きご支援をよろしくお願いします。

※スポンサーシップ・プログラムの終了学年

シュリカンタ・ルイテル
Shrikanta Luitel

2019年入職。スポンサーとチャイルドとの手紙のやりとりに関する業務などを担当。

仕事のやりがいはどんなところですか？

ネパールの子どもたちと日本の支援者の皆さまをつなぐ役割を担うことができ、そしてそれが結果的に、子どもたちの権利を守り、教育を支えることになるのがやりがいです。また、子どもたちの声を聴き、様々な意見を交わすことができるのも、私にとってとても貴重な経験です。

支援者の皆さまにメッセージをお願いします

ネパールの子どもたちをご支援くださりありがとうございます。子どもたちや学校はご支援のおかげで様々な恩恵を受けることができています。ご支援者さまは、日本とネパールをつなぐかけはしであり、友好関係を深めてくださる存在だと思っています。これからもご支援をよろしくお願いします。

2014
シンドゥパルチョーク郡で支援開始

2016年にはスポンサーシップ・プログラムも開始

2015
ネパール大地震発生

緊急・復興支援を実施。その後、地震に強い学校づくりプロジェクトもスタート

2022
ゴルカ郡、ダーディン郡で支援開始

ゴルカ郡では、地震に強い学校建設とともに教育の質向上の支援を実施。ダーディン郡では、スポンサーシップ・プログラムの支援等を開始。

子どもを搾取から守る!

最前線で働く トップランナーインタビュー

2022年9月、チャイルド・ファンド・ジャパンは、OSEC(子どもへのオンライン性搾取)をなくす取り組みの一環としてシンポジウムを開催しました。ここでは、お招きした専門家へ行ったインタビューを抜粋してお届けします。

ステイサ・シーハン(写真左)
全米行方不明・搾取児童センター(NCMEC) ヴァイスプレジデント。2017 年に米国政府の「子どもと若者の性的人身取引のための国家助言委員会」の委員に選出。

ガブリエラ・シェーネクル・ウォルフ(写真右)
スウェーデン 子どもへの商業的性搾取をなくすためのオンブズマン(OKSE) 代表。自身も子どもの頃に搾取を経験した当事者(サバイバー)。

――お二人はどのようなお仕事をされていますか?

ステイサ:私は子どもの行方不明や搾取を扱う団体に所属しています。そこで情報収集や分析などをしています。

ガブリエラ:政府に対して、子どもの性搾取問題についてアドボカシー(政策提言)活動をしています。政府の政策が被害者のためになるよう取り組んでいます。

――現在のお仕事に携わろうと決めたきっかけを教えてください。

ステイサ:私は大学で心理学や刑事司法を学びましたが、その学びを社会に貢献したいと思ったことがこの世界に入ったきっかけです。

ガブリエラ:私は自分自身が被害者でもあるので、被害者ネットワークを作りたいと思い、19歳の時に団体を立ち上げました。

――ガブリエラさんは、学生時代に団体を立ち上げたということですが、勉学との両立は大変だったのではないでしょうか。

ガブリエラ:団体の運営にはとても価値があると感じていましたし、社会に変化を生み出せると感じていたので、活動を続けることができました。また、心理学を学んでいた時期もありますが、被害者に与える影響を学術的に捉えることができ、役立っていると感じます。

――ステイサさんのお仕事では、被害者の方とどのように関わっていくのでしょうか。

ステイサ:私たちの団体では直接被害者の方と関わることはなく、主に被害者の方が救われるための手助けをしています。例えば、被害者の方が求めている情報を提供したり、ニーズに合う機関を紹介したりするなどしています。

――被害者になりうる若者世代が、アドボカシー活動に取り組む意味は大きいと思います。より多くの若者を巻き込むには何が必要だと思いますか。

ステイサ:恐れずにこの問題を伝え続けていくことが大切です。若者世代が力づけられ、活動することが、よりよい明日につながると思います。

ガブリエラ:この問題がどこにでも存在するということを多くの人に知ってもらうことが大切です。そのために、この問題を言葉にしていくことが必要だと思います。

インタビューのフルバージョンは、動画で公開しています。

インタビュアー 高橋さんの感想

実際に現場で活躍されている方のお話には訴えるものがあり、あらためて子どもの性搾取問題とは根深く悪質な問題であるのだと考えさせられました。それと同時に、小さなことからでも地道に活動を続けていくことの大切さについて強く実感しました。

大学2年生。高校生の頃から女性や子どもの課題に関心をもち、2021年より、チャイルド・ファンド・ジャパンとともにOSEC をなくす活動に取り組んでいる。

高橋さん

現地で見えた人々の不安、戸惑い、怒り

～ウクライナ現地視察報告～

2022年8～9月、東京事務所スタッフ石関（支援事業部長）が、ウクライナと隣国モルドバへ視察に赴きました。今回は、避難民の人たちが抱える様々な思いや厳しい現実などに焦点を当てて、現地の様子をお伝えします。

支援事業部長
石関

戦地から離れたウクライナのオデッサ州西部。車窓から見える光景は、起伏の緩やかな平原に見渡す限りの麦畑、営業中のスーパーマーケットや銀行、駐車場に停まっている車。途中ライフルを携帯した兵士がいたチェックポイントを除けば、軍事侵攻を受けている国とは思えない平穏な光景のように見えました。

しかし、戦地を逃れてきた人たちが聞かせてくれた話からは、余所者の第一印象とは違った心の風景が垣間見えました。隣家がロケット弾の直撃を受けるなど、住み慣れた街が瞬く間に戦闘地帯となってしまい街から逃げざるを得なかったことへの戸惑いと憤り。これからどうなるかは戦況や外交交渉次第で、自分たちではいかんともしがたい閉塞感。避難先で収入をどう確保していけるのか？厳しい冬をどう乗り越えていけるか？子どもの将来はどう描けるのかといった親としての不安を口にするお母さんたちの声も聞きました。同様な話は、国境を越え、隣国モルドバに避難したウクライナの人たちからも聞きました。

一見平穏に見えるオデッサ南西部の町

ウクライナからの逃避行、母としての不安などを話してくれたウクライナ難民オクサーナさんのインタビュー動画

現地に入っていて気になった一群の人たちがいました。ロマ（敢えて差別用語を使えば「ジプシー」）と呼ばれる人たちです。彼らは、ヨーロッパで数百年に渡り偏見と差別にさらされてきました。第二次世界大戦中には、ナチスによる大量殺害という憂き目に遭いました。私が訪問したウクライナ隣国のモルドバの難民受け入れセンターには、戦禍を逃れてきたロマの人たちが避難していました。ロマではないウクライナ難民は、モルドバの賃貸住宅や空き家をあてがわれ、難民受け入れセンターを出ていくことができましたが、ロマの人たちの受け入れには現地が難色を示し、センターから出られず、行き場を失っているそうです。ロマの人たちへの支援をしているパートナー団体もロマの子どもたちが現地の学校への入学を認めてもらうのが大変だとこぼしていました。災害や紛争が起こる前から弱い立場にある人たちは、緊急下においても弱い立場になりがちですが、非常に難しい課題だとあらためて思いました。

ロマの子どもたちを受け入れているセンター

最後に、ウクライナで出会った16歳の高校生の言葉を紹介したいと思います。彼女は防空壕に避難しているとき、どうして私は住み慣れた故郷から逃げ出さなければならないのか、どうしたらこんな戦争状態を脱せるのかネット上で答えを探し、彼女なりに考え、答えに辿りついたようです。ウクライナ人道危機に心を寄せてくれる同世代へのメッセージとして私に託してくれました。皆さんはどう思われますか？

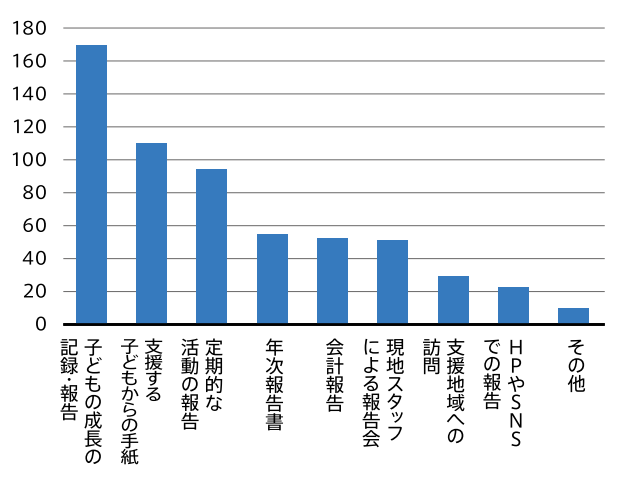
「戦争では一般市民、特に女性と子どもが犠牲者になります。話し合いで問題を解決する外交こそが解決する手段です。戦争は解決手段ではありません。この戦争は大国間のいわば『ゲーム』ですが、ゲームプレイヤーである人たちは傷つきません。傷つき、犠牲になるのは私たち市民です。」

アンケートへのご協力、ありがとうございました！

昨年９～１０月、スポンサーの皆さまにスポンサーシップ・プログラムについてのアンケートをお願いいたしました。ご回答いただいた皆さま、ありがとうございます。結果の一部をご報告いたします。

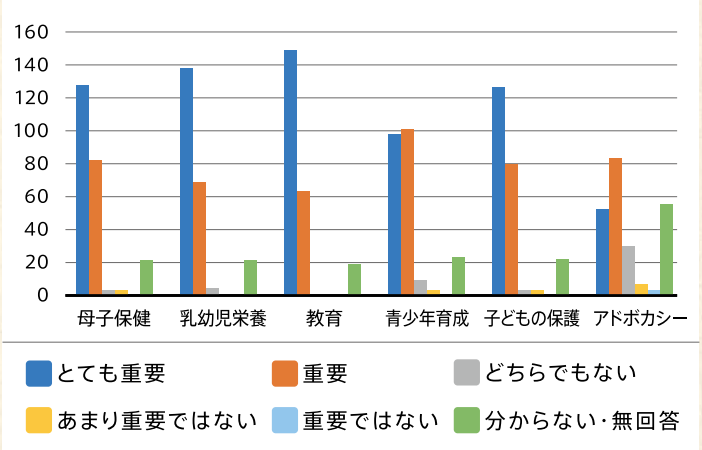
質問　皆さまへのご報告で、重要だと思うものをお選びください。

子どもたちの成長が見える「成長の記録」がもっとも多い結果となりました。ここ数年、写真を増やすなど改良を重ねていますが、今後も皆さまに子どもの様子がよく伝わるよう、改善を検討してまいります。



質問　寄付が使われる活動テーマについて、重要度をお答えください。

「教育」をはじめ、いずれの分野も重要と感じていただいている様子が分かった一方、アドボカシー（政策提言）については「分からない・無回答」が目立ちました。今後、アドボカシーについてより分かりやすく皆さまにお伝えしていく必要性を感じました。



インフォメーション　コーナー

お知らせ　領収書の発送が完了しました

2022年にいただいたご寄付の領収書の発送が完了いたしました。チャイルド・ファンド・ジャパンは、「認定NPO法人」に認定されており、ご支援くださる皆さまには、所得税、法人税、相続税などの税制上の優遇措置を受けていただくことが可能です。特に個人の方がチャイルド・ファンド・ジャパンに寄付をした場合、最大で寄付金額の約40%を、所得税から控除できます。一般的に、税額控除方式を選択されると所得控除方式より大きな減税効果が見込まれます。詳しくは、「寄付金控除について」のページをご覧ください。

https://www.childfund.or.jp/support/deduct.html

チャイルドファンドジャパン　寄付金控除　検索

お知らせ　自転車支援プロジェクトを進めています

深刻な経済危機に見舞われているスリランカ。燃料不足から公共交通機関の運賃が値上がりしてしまい、人々の生活の足が奪われています。

現地では自転車の需要が高まっており、スリランカ政府関係者からの要請もふまえ、チャイルド・ファンド・ジャパンでは中古自転車の支援を進めています。日本の各自治体から放置自転車等を提供いただき、スリランカへ届けます。今後、現地からの声なども含めて、活動のご報告をしていく予定です。

ChildFund Japan　Vision Mission

**チャイルド・ファンド・ジャパンは
ここに掲げるビジョン（目標）、ミッション（使命）に
基づいて活動します。**

ビジョン（目標）
**すべての子どもに
開かれた未来を約束する
国際社会の形成**

ミッション（使命）
**生かし生かされる
国際協力を通じて
子どもの権利を守る**

チャイルド・ファンド・アライアンス　ChildFund Alliance

人種、宗教、性別、国籍を問わず世界の子どもたちに、効果的な支援活動をするためのネットワークで、子どもたちに向けたスポンサーシップ・プログラムを行う11団体から構成されています。チャイルド・ファンド・ジャパンは2005年4月に加盟しました。

チャイルド・ファンド・ジャパンだより SMILES（スマイルズ）

特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン
〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-17-5
理事長／髙橋潤　事務局長／武田勝彦
TEL. 03-3399-8123　FAX. 03-3399-0730
E-mail:inquiry@childfund.or.jp
URL:https://www.childfund.or.jp/

2023年2月発行
〈デザイン〉
モスデザイン研究所
〈印刷〉
吉原印刷株式会社